

『殺生石』と源翁禅師の事蹟

天野文雄

『殺生石』のワキは源翁という実在した曹洞の禅僧である。そのことは早く豊臣秀次の命で編纂された『謡抄』に「玄翁ハ洞下の僧也」とあり、寛保元年(一七四一)序の『謡曲拾葉抄』では『海蔵寺開山伝』によって、昭和初年の『謡曲大観』では『本朝高僧伝』(元禄十五年序)によってその事蹟が伝えられていたが、それを承けて『日本洞上聯燈録』(享保十二年序)等の僧伝類や源翁の開基になる諸寺院の縁起などによって、源翁の事蹟について詳細に論じたのが香西精氏「作品研究『殺生石』」(『観世』昭和三十九年九月、『能謡新考』所収)と伊藤正義氏「殺生石―げんのうといへる道人―」(『かんのう』昭和五十七年十一月、『謡曲雑記』所収)、同じく伊藤氏の校注になる新潮日本古典集成『謡曲集(中)』であった。一方、『大日本史料』応永七年(一四〇〇)正月七日の源翁没を伝える項にも源翁関係の史料が数多く集められ、『国史大辞典』の「源翁心昭」の項にもその伝記がまとめられている(執筆は今枝愛眞氏)。これらに用いられている史料の多くは後代の伝承的なもので、各事蹟の年次にも史料によって違いがあるが、とりあえず源翁の事蹟を私に整理すると、

源翁は越後の人、総持寺の峨山紹碩に学び、まず伯耆退休寺の開山となり、以後、美作化生寺、下野泉溪寺、下総安穩寺、

白河常在院、会津に慶徳寺、示現寺などを開いたあと、応永二年(二二九五)あるいは至徳二年(一三八五)に、那須の殺生石が近寄る人畜禽獸に害をなすと聞き、那須に赴き殺生石を濟度した。これによって源翁の令名海内に高く、將軍義満は下野泉溪寺に庇護を加え、源翁を同寺に再住させたという。また、後小松天皇(あるいは上皇)から「大寂禅師」「法王能照禅師」の勅号(あるいは源翁没後の諡号)を賜わり、応永七年(一四〇〇)に七十二歳、あるいは応永三年(七十一歳)をもって示現寺にて没。明応七年(二四九八)に会津で百回忌が営まれた。泉溪寺、示現寺、常在院に像が残り、墓は示現寺と安穩寺にある。また、源翁を玄翁、元翁とする文献も少なくなく、現行諸流の『殺生石』の謡本も「玄翁」とするが、「源翁」が正しい。

となろうか。

このような源翁の事蹟のうちでも、とりわけ著名なのが、『殺生石』に描かれた那須野における殺生石濟度であるが、ここで注目されるのが、後小松天皇(あるいは上皇)が殺生石濟度の功を称えて、源翁に「大寂禅師」「法王能照禅師」の号を賜わったという伝承である。これは後小松の源翁への敬慕を意味す

るものと解されるが、そのことは僧伝では、『日域洞上祖師伝』『日本洞上聯燈録』に「後小松上皇」が「大寂禅師」の勅号を賜わったとし、源翁ゆかりの禅院史料では、示現寺の『法王能照禅師塔銘』に源翁没後に「帝」が「法王能照禅師」の諡号(贈り名)を賜わったとし、近世の地誌『新編会津風土記』では、示現寺の宝物として源翁の数珠と香箱を、殺生石濟度のさい「後小松帝」より賜わった宝物として挙げ、『下総旧事考』にも「後小松天皇」が安穩寺に「大寂院法王禅師」の「諡号」を賜わったことがみえていて、近世には広く流布していたことが知られる。この多くは近世における源翁ゆかりの曹洞の禅院を中心にした「伝承」だが、事実とすれば、源翁の事蹟についてはもとより、『殺生石』理解にもそれなりに影響を及ぼすことになろう。

これら後小松による源翁への禅師号下賜を伝える史料のうち、もっとも古いのが、応永七年(一四〇〇)正月七日の源翁の没後、同年の十月に源翁の嗣法で示現寺二代の天海空広が著した千六百字あまりの『法王能照禅師塔銘』(示現寺蔵)である(源翁の没年は応永三年とされることが多いが、これによって応永七年とするのが妥当であろうか)。

この塔銘によると、後小松時代の康応元年(一三八九)に那須野に毒氣紛々たる怪石が出現し、これに触れる者は命を落とすようになった。世間ではこれを殺生石と呼び、諸宗の者がこれを降伏させようとしたがうまくゆかず、明徳(一三九〇)の初め頃、「相将帥」(將軍であろうか)がその事態を本山の能州総持寺に告げたので、総持寺では衆議の結果、宗令大徹をして殺生石に赴かせたが、大徹は

靈石を救うことができずに戻ってきた。そこで「帝」は「驚愕」して、応永二年（一三九五）正月に、こんどは源翁に命じて靈石を救おうとした。源翁は靈石に向かって、「汝元來石頭、喚作殺生石、靈従何處來、性自何處起……」と唱え、手にしていた拄杖を一打ちすると、靈石は忽然と割れた。その夜、端正な靈女が源翁のもとにやってきて、自分は石魂で宿業のために八万劫も野狐の身に堕ちている者だと言ひ、天竺では班足太子が祀っていた塚の神、唐土では殷の紂王の妃妲己、周の幽王の妃褒姒、本朝では近衛院の姫、玉藻前であったが、宮中の管絃の席でその身から発した光によって院が御悩となったことで、この那須野に追われて落命した。その靈魂は化して石となっていたが、和尚のおかげで天上樂土に到ることができた。願わくはわれに淨戒を授けよと言うので、源翁が戒を授けると、靈女は礼をして立ち去った。

この報告を受けた「帝」は勅命で源翁を「供養」しようとしたが、源翁は応じず、また紫衣を与えようとしたが、源翁はこれも固辞したので、帝の源翁への敬慕はいっそう強くなった。また、「相將帥」も感激して利根川百貫文の地を（泉溪寺に？）寄進したという。

『法王能照禪師塔銘』では、このあと、嚴島に参詣した源翁が龍王を濟度したことが記され、源翁が応永七年正月七日に示寂したと聞いた「帝」が、「法王能照禪師」の諡号と「大寂」の塔号を贈ったことが記されている。これは源翁の示寂直後に作成された塔銘であり、「帝」は後小松である。これによって、後小松の源翁敬慕はまず事実としてよく、後代の文献にみられる後小松と源翁の関係を伝える事



「大寂院」の勅額
栃木県・泉溪寺蔵。写真提供：那須烏山市教育委員会

例も、この事実に起因するとしてよいであろう。

この『法王能照禪師塔銘』の記事は、いわゆる玉藻前の物語と源翁による殺生石濟度譚の二つを合わせた形であり、このような源翁についての伝記としては永享元年（一四一九）に大仙良碩の手になった『源翁和尚行状之記』（三卷、白川常在院蔵）があるが、この点は『殺生石』も同様である。『殺生石』は応永頃には生まれていたこのような源翁の伝記と玉藻前の物語をもとに制作されたものと思われるが、それはともあれ、後小松の源翁敬慕を伝えるのは、これだけではない。それは栃木県那須烏山市の源翁の開基になる五峰山大寂院泉溪寺蔵の「大寂院」の額で（写真）、これは後小松の勅額と伝えられていて、那須烏山市の有形文化財に指定されている。また同寺には、勅使門と呼ばれる四脚門が伝存している。この四脚門は現在は老朽化のため解体されて保管されているが、解体前の写真は同寺のホームページで見ることができ、これも同市の有形指定文化財である。また、後小松の勅額といえは、元禄十六年の『結城使行』に、当時の結城安穩寺（同寺も源翁の開基）に後小松院の宸筆になる「安穩寺結城山」の勅額が存在していたことが記されている（この勅額は伝存していないようである）。

また、これは源翁と後小松との関係にも関連することだが、源翁は將軍義満の帰依も受けていたとの伝承がある。たとえば元禄六年（一六九三）序「日域洞上諸祖伝」では、源翁の殺生石濟度を至徳二年（一三八五）としたあとに、

征夷大將軍義満公、重興泉谿寺、堂殿樓閣
庖廩、極其完好、像設丹堊、尤劇殊麗、且施
那須莊田二千余石、以資食輸、乃請師再住之。

と記している。源翁が殺生石を濟度した褒賞として、義満が泉溪寺を再興し、莊田千石余を同寺に寄進し、源翁を再住させたというのである。これは『日本洞上聯燈録』にもみえる記事だが、史料としては江戸前期をさかのぼらない。しかし、さきに紹介した『法王能照禪師塔銘』の「相將帥」が將軍のことであれば、『塔銘』も義満の源翁庇護を示す早い時期の史料となろう。後小松の敬慕を勘案するならば、將軍義満の源翁への帰依も十分ありうることにように思われる。

以上を要するに、源翁は殺生石を濟度した高僧として公武の尊敬を集めていた人物ということになる。そのような源翁の事蹟が南北朝には生まれていた玉藻前の物語と結びつき、能『殺生石』が制作されたのだが、とすれば、源翁をワキとする『殺生石』はたんに玉藻前という異類濟度を内容とするスペクタクル能というだけでなく、世人に平安をもたらした高僧源翁の事蹟としても受けとめられていたとみるべきであろう。そのことは『殺生石』においては、玉藻前が源翁に危害を与えるような存在としては描かれてはいず、玉藻前の化身が源翁に殺生石に近づかぬよう忠告し、

「懺悔の姿を現はさん」と言つて中入したあと、後場では二つに割れた大石の中から現われ、那須野で討たれて殺生石となるまでのことを「懺悔」として語るといふ展開、つまり玉藻前は一貫して源翁の済度を求めているという展開にも認められるのではないだろうか。

なお、『日域洞上諸祖伝』などでは、上述のように源翁による殺生石済度を至徳二年としている。永享元年の『源翁和尚行状之記』も済度を至徳年間としているが、この種の史料としては、このほかにも以下のような下総安穩寺文書の後小松の論旨がある。

下野国那須泉溪寺源翁禪師者、曹洞之嫡流惣寺之逸格也、此度於那須野、済度殺生石、救国民悲歎、揚芳名天下、恢張祖道、依是補任大寂院法王禪師者、天氣如此、仍執達如件

至徳三丙寅年

九月十五日

左小弁〔在判〕

源翁和尚禪室

これは『結城市史』所収の文書だが、安穩寺にはこれ以外にももう二点、至徳三年の後小松の論旨がある。『結城市史』では、これらを含む十二点の文書を「研究を要す」としているが、たしかに冒頭が安穩寺ではなく「下野国那須泉溪寺」となっていたりする点、検討の余地がある史料ではある。一方、この論旨の内容は泉溪寺蔵の「大寂院」の勅額と呼応している。源翁の殺生石済度の時期については、『法王能照禪師塔銘』では応永二年とするが、これは今後の検討課題であらう。

(京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長)

■第47回堺市民能が7月15日(土)午後1時45分より堺市立西文化会館にて催され、能天鼓弄鼓之舞 長山禮三郎が上演される。番組は他に狂言 延命袋 茂山千作、舞囃子 屋島 観世喜正、紅葉狩急之舞 観世鏡之丞、仕舞5番。入場料 一般前売3500円、割引前売3000円、当日券は各500円増(全席指定)

お申込み・お問合せ 堺市文化振興財団

TEL 072・228・0055

■国立能楽堂7月定期公演が7月19日(水)午後6時30分より国立能楽堂にて催され、能山姥 野村四郎が上演される。番組は他に狂言 隠笠 山本泰太郎というもの。

入場料 正面4900円、脇正面3200円
中正面2700円、学生脇正面2200円、
学生中正面1900円(全席指定)

お申込み 国立劇場チケットセンター

TEL 0570・07・9900

■7月22日(土)国立能楽堂にて第15回興福寺勧進能が催される。番組は午後1時30分からの1部が能 野守黒頭 浅見真州、狂言 咲嘩 野村万蔵、お話 西野春雄、午後5時30分からの第2部が能 小塩 浅見真州、狂言 長光 野村万蔵、お話 馬場あき子というもの。尚、興福寺勧進能は今回をもって最終回となる。入場料 A席9000円、B席7000円、C席5000円(1部、2部入替制)

お申込み・お問合せ 興福寺

TEL 0120・597・767

■川崎市文化財団主催による第27回夏休み能楽体験・鑑賞教室が川崎能楽堂にて3日間にわたり行われ、最終日の7月29日(土)には午後1時30分より能 小鍛冶 鶴澤 光が上演される。またそれに先立ち、27日(木)午後1時より能についてのお話しと子供たちの仕舞発表会、28日(金)には午前9時30分と午後1時の2回、仕舞、謡、囃子の実技体験がそれぞれ行われる。講師は鶴澤久、鶴澤光、藤田貴寛、鳥山直也、佃良太郎、徳田宗久。

受講料 2500円(鑑賞料・教材費含)、能鑑賞のみは2000円

お申込み・お問合せ 川崎市文化財団

TEL 044・222・8817

■国立能楽堂7月企画公演、復曲再演の会が7月30日(日)午後1時より国立能楽堂にて催され、平成3年に能の会にて復曲初演された復曲能 鶴羽 大槻文蔵が上演される。番組は他に狂言 鞆猿 大藏彌右衛門。

入場料 正面6300円、脇正面4800円
中正面3200円、学生脇正面3400円、
学生中正面2200円(全席指定)

お申込み 国立劇場チケットセンター

TEL 0570・07・9900

■越敷神社共同舞台く能・人形浄瑠璃・サツクス・琵琶との光りの共演くが佐渡市猿八の越敷神社にて7月30日(日)午後7時より催される。演目は小宰相と通盛、牧神の午後というもので、清水寛二が出演する。

お申込み・お問合せ 山本